繫辭諺解

三卷

へ13
3139
3

古今奇談繁野話第二卷

㊄ 白菊の古袋掛の岸より怪骨を射る話

古人云。鬼神と山魅の類と幽現の別あり。山魅木客岡兩猿狐乃類は皆形體あるのゆゑ時ありて形を隱し時ありて形を現ず。是よりさへ靈明を使ふの巧拙の分あり。巧なるはゆゑを役使し人の魂を發さしむ。拙きは靈を役して人を役せらる。鬼は人沒して土中に攻の名あり。骨肉は土に屬し。其氣は發揚して空にあるは鬼の神となり。體なく發なし。是も尚異常あり。考るべ祭まで隆く嚮祭る人の公に交て。近くて其跡なし。異なるべ人に托して語て人に附て靈なりしむ。形體なく死の人にあらず形なく身は然なく靈を示すは生なる人のあふをゆゆしき惡鬼の虎に使ふ。狗神の人のあふ今る類あり。凡そ生る人五に種この有情のゆゑ皆神ありてあに附き人に托し。

市谷若松屋
田町藤兵衛

へ 13
3139
3
昭和九年九月十二日 購求

るふる死鬼の神ようも霊なる。性身と先みて人のみを後と
を。見せ者の天情よりて世の人多く免まぬ故に自身に其神
の通じる所をひろげども。他人に知らるゝなり。上古山川草木ま
ざ明明ど人語も密なるべし。山魅の類人に近く。形を現じて人間に来
て交る。人皆山魅の為和を知る。後世人民繁息し。山を開き海と
築て其食を足し。険を通し水を引て其運輸よたよりす。人多く自
ら蹊を求し。地平らなれば人あり。まりて居とん。龍蛇犀狼恐れて
人に遠ざかる。山魅罔両尤も霊なれば。をく深く匿て人間に
近ゝず。後の人多く目にみざるゆえ鬼と魅との分とをゝど混
して一とし。又古への怪事を伝て。今見ざるを疑て疑をたてもあり。
古へに有しを伝て今もあるゝて理を誣るもあり。又古へあるの
い今もあり。今なれのるい古へもるゝとゝるい時変ををゝざる夏

虫の見なり。毛れい文なれば人天然に近く間長生もあり。求めずしてよく
和し。巣居穴をもり穴居あるを。深山大澤何の怪らるしゝ。者
本国に住来る商客。木曽の妻籠とゝ所に脚を傷り数日滞留。
寒暑れ昊間も長夜れ話に尽。地名産物も計にくしゝ。形甚里に
組上ゝ久しく住る老人座にありて云。ぬを妻籠と名ゝるゝ。
いくれある中に老人ども。ゝ住人ゝ長地流の伝ゝて。田舎人の口銘く
伝り出せるい事。怪しくぞしれども。誠に多の妖霧てして毒気
家の深山見に見て国の話にあゝぞ。清和天皇の時。美濃守源朝臣
頼を信濃守に補任せゝてあり。其時。使ゆれ国住屋大領の守。
須守廉。榊門の吹挙よりて信濃。掾になりて。国なる妻女を催登
せざるべき家人等を召具して本国に路に赴き。日数歴て苑原と信
濃れ界なる岐蘇の深坂よりぬ。笹原多多紛に霧けくて険き路

又歩行をなしがたき歩行。人馬共に疲労を除くるむつかしい夫法と信法と
通路不便なりと。文武の府波蘇山道を開き山石を砕き橋を造
し。當時何年に成べきも路定つがたく。えよう此山中烟瘴深く。妖怪出
没し。往来多かべき人を狂風甚だ甚西石の面に山中に人跡つ
らざる石多し。ぜこの道を狩として石と飛あり。後世其所さぞうの
ど。其懐に一つの洞あり。陰を神仙窟とて。たい霧立こめて人と方
格定あがたし。数十年の内なくあらいれ。洞の中に宮殿有ること
とあり。山下の人民人間にそ。お狂成る所い早く其石を切る。若し
ためひてこととんとすれば忽ち空より大石落ちり粉碎とする。此
洞に一つの怪物あり。出る所い一片の雲となりて飛行をなす人ようなと
つけて飛雲と云。其中は猫猴の精あり。神代よりこれをそ神
通廣大変化きする由。朝夕一物を始して山海に家成人と在

ど欲しきものを振て備る所に任せざるなく。時々人をとぶらひ宝成
かりをもこと。神祇もこれを制とることあらざれば冥酒に飛ざれば飲ど冥飯
に飛されば云ど陰陽採補の術をなして長生する成妙理。近国諸山
の妖怪山精化らんが部下に成て猛獣を役し耳報れ術をなく。
洞の中に居ながら百里四方の動静を明らかなること。若上聖人のわし。
てに一日西南の方より山路を来る一行の旅人あり。其中に一乃
張輿あり。飛雲古狐成系を乗て輿の内焼き婦人あり。容貌冥雅
にあそなる顔花のごとくなる。其支干を推察をして既に十六
家にて夫に成べし。今年二十三歳におよぶ。いざや掃来り酒
宴の奥を添んと。即時小山神小命じて往還の路上に一つの旅館と
化現せ。紀州に宿駅をけんばかりの宿屋を設て。旅客をとらへて
女を攝て洞に入る。一山神承て結搆をなし。俄に白日を暗夜とす。

守廉山路に倦(うみ)はれて日も斜めなれば山亭に来り宿る従者奴婢(?)
居ながれて休息す飛雲宿の老翁に化して心よくもてなし家内(やうち)
に出て物語しける翁今年八十余歳耳はいまだ聡く雷も落かかりても
聞えねば物その用に立ねども殿の為にはよき事もありてあまた年より
向は山なれば深く盗賊狼の害多し奥まりたる女房の住方は此翁の許
より餘りなりて殿向へ参る事ありて多人数を以て追へこそせよ(?)此宿(?)の真周
より女を奪ひたる山賊のありければ是々なりとて守廉答へて我は
かねがね此の本来を知り本国にても武きものの殺すにて打まするく(?)
いかなる猛(?)まで山賊に用心をすべき殊に天聴の命を蒙り此国の鎮として
我等来る所の老党若党は一人当千の家の子なりと勢ひけるとき
詞に亭主も其席を退ぬ若党雑人は端に臥使女の室は脇の方に
臥ぬ守廉は妻の白菊と正面の間に宿りて山中の静なる秋のさびしさ

侘しく寝がたくして笑ひ興ずる所にさそへがてら眠きざしぬ
なかなかと寝たれど寝ふたりける程に風の音に目覚し傍を見れば早く女房もとに
見えず清廁に出たるにやと暫しのあひだ待てどもかへらざれば家々を見
しきれなくえざしとるへしは立木の隈に使女家人等も皆寝て居る
よしまうび伏たりこはいかさましと急ぎ呼びおこしてせば家の子らもさそ
じめて心得たれども一つの民家もなく月光ほのかにていかなる
宮寺の鐘声を聞ける初夜なり守りども其の心地してをるる
妖怪のなすわざにて旅宿を假に現じて女房を奪ひ行きや山狢などにて
あるらん所々を尋ね迷へども今はいかんせん樹下に露を凌ぎて甚夜を
明し民家ある所に至りて人馬をもとめ家人を東西へ分ちかうさ
ぐりおはしも何を見出しこともなく山中まで分かるまでは間に多
かるとなきける恩愛のなかは勿論女房を妖怪にとられし本国の一門に

仙の面目ありて再舎たべきと拘狂しきをふ懐まどもぞるる多る
あり点漫しぐ〜と其形を変して國れ府よりつう。國司る謁をれ
て茶の椀を代りて幸る国の旧きを猿まるに意く身のうへとかう。
面勢を国るあるへとれ。りうどは人る射面なしがるれ病あうと故意。
川茶てるる体るて。仏服の家のるこ人を泛へ女房の生死と元祖ぞんぞ
やしかうぞと猟をるのさるして。法名の新形をるかこるなれ不まぞ
探り迷る白菊の方へ変れる撫を洞のうちるてうても。ちぐーい死も
ふいざりしれ人こちにきて。抜い鬼の洞るとうるせられるるとる人
べ胸つぶれて涙湧て涙る。係国るとめぐ〜し性茸をるれべ媚り体
女房我人も伏侍て大れるとこしくて新赤く鼻尖て。身れけ一天
ぞう門の仁るのぞれが。後の衣服る体とる性内をゆるれ出て白菊
の傍るむりれ近づき。緑あれぞちてぞれ不もむ人ほぞ。洞のうち別

にての世界るてぞれに来る妖女ハ手と捜ても新色かるれ。法名
なげき我をて我るよくなるし長生を楽めと。我とるて泪やう
るかるへた。白菊ハ彼が美極る恐ろしきれ氣も魂も雲間る死ぞう
るなれど国るるれ鬼のとうちなくてぞふるるかるるとるるうう。
我にるく変れる白ひ自はさうくれ不の楽る我れ彼迷る死
せんる我会ど。涙るの振色あるば古我哈ても死ぞきとぞげしき
詞ハ悪はしかん。白き耳根る黒き髪のるばるるう。泣低一新
乃れ粧の泪る洗れるるる。悩る西施涙る虞氏昭君出塞憂
容揚妃馬嵬の愁眉もかくやと。ぞれるまぞれ天狗の國る色る世さう
べ身とる失ちるんと。女房等るあせて誘なたけ古りんとんる多の女房
いでるういざるて性蚕る引んるん。白菊是を拒るて我宿人の妻と
して由なれ不の性内る入るべかるどと。塩る氣れたうひ生ふ捜て動す

花雲笑て世人よ逸言べらべら我い小宮よ一睡して和歌の労を息
んゐるぎ幼ぬ女房の中も世花阿弥ちらくようてら南のてら我
てさうなるぎあさゐぎよをめてら人断なるうへ世くるるてら詮
なるてらう。者より車き新掘ちそいからとさげぎてとがて。
ゐ紙くも皆厭ぬ中とさめまてらてら紙来て。逃ま出んとる
て歳度なれど山中の方格を紙だ。幼て田の隠へぎう逐よ
出ることあさびて院よよ美の春紙てう。ほ男の今変化を初てえ
るゐのでく。かるむくにけき貌よあるずとも。えよう女い男紙
醜を端ぎべきあふあるずい変化里よ出そ甚ら時い甚ら反優よ
きく國司の形粧をなし。其人柄をだれてうるてだあ紙べとそいう
にんぎうて泣ゐんや朝夕よ別きべうてあ紙彼が心よ泣へべ彼ままき
ふを用てめぎみおるれむされだあそまれるくがあきも死をべき命と

ぬをみのいなる紙世紙むさがりのるる風のとゐよ吹き三水の海よ
吸をゐと待身とになりぬよ従いぎ紙世若紙あるへにるく懲しら。
遂よ妖術よ惑し誘ふんきるるに早く泣ふをぬつ初とつぎし
と和るふをもれど白系答へぎれ世紙だ。女房ども詞にきて並
の人心とあずとりきるめ。死雲今ハ大よいるて白菊を下ゐよ
正。洞の中ハ用水を遠きて吸とるせ。衣服を洗へ賜の役とゐさ
しむ。白系却てうとるうき素よ宮ひ月くみ宮ふ下て水と汲
こ衣をあるひいやしき紫をなんとも。身を汚をるほはさりぬと
心よ思りて故の土神を祈て再び家よ返じわるへとおせぬ日ゐ
なりのき。洞の中日数い宮へ祈ども。月の宮き紙月のゐてとう。三月
歩の後花雲其容色の若るて裏へんて紙虜ひ。出ぎ〜猿紙
をゆるて独を去りむ。一日南面よ宴を設けて宮紙寿紙白

爲を酌まんとしむ寵愛の緣樹此花梁淑吳の行など宴を催
て。其餘の女緣ふ羅ひ行よ欲ひ眞ある席よ白柔ちきりに眠を
假とう變化が女ちゝに相狎て歳ふくを。月の不洋ふ後ゞしく
俯よつま。酌とくなが〳〵妙ゝ〳〵祭ひりて酒をこがをもちゝず。花
雲ちゝあく罵て拳をあげ撲んとせゞぴ羅秋よ世座より亟
よ谷二つあるこの瀧を泝て來ヨとちゝ爲ぬ。白柔ハ爲あく
きちせりと身れ羅をちゝ。桶を肩ほて蹊をめぐり流れ泝ひ。
ちゝや淵ふ躍てとふ〳〵どゞし世なゝでるあゝ也あるゝ。命ちそ抛て成
就をる極なり。變化が今角ふ爲ちよて勝人かれもゞ手紅ちる者
しなゝんゝちそ死ん命をにぎそ爲かれ人の果とそ俤とゞこ
ぶ爲なこのみゝぎりゝの涙ゝ〳〵ちる〳〵。二つの桶よゝこのゞせ爲めれよと
休むる者よ珍しや其このゝ。世れ中の人とそいふほうふ人來ざりしよ、

向の峭をつゝひ爲なれよ菖を引く出て來る人あり。弓矢の三位
ひたゝカ力ちびゝう。猛人なゝんと迫ぢくとそれ。夫守廉なりいふ
こいゝうゝうにをゝぬゝと。早くもれをゞつて女まゝう泣て詞出ゞ。守
ゞど旦在び旦ゆるゝげふ。我い別てよう家とをそ孤を擲てぴ山づ
きの麓乃里よさ俤ひ。約束を弱ゝと硯よ三月よあ爲まう。今
日ゝに來ゝ逢て夫婦の緣爲ぞ。ゝるゝとたゞひよ涙ぐ泣ゆゝる。あ
しも何あの所爲なるぞと問ゝ在て。身の憂ゝい飯倉の山も爲
さゝつゝさ我かゝうゆゝる變化ゝて。ゝそあ主。洞ハ見ゝ西よゝあゝる
某の樣よなん結ゝと。語ゝ我ゝて守廉ぴ爲ゝ。ゝ我ゝこゝて巡ゆる
ゝも。祢亟の妖怪十里ゝ在のびさゞ爲ゞ。迫治せんゝも佛祢の力
とかゞぞ在いゝ本性を逃せんや。人多く住ゝ。後の十あ日よゝゝに來
ゝ爲かゝゝ出合。菓内さゝて洞よ斬入ふべゝ。其あゞは氣ゝ我

察らまでも心をうばてたくしみ。身を汚さん方仕ちをあらん。今世不ふ時うつゝべ変化いろんさがうん。我は早く立別まんと行を放ちうて暇乞と情むに男も仏よろ者の上まろ〳〵り座しつぐ〳〵と女房のさ爰をとて。客迎い表へねも孤て指ぢを巻てやんと。胡坐より腰掛ろう出し。岩水よ髪のをさみとうるほし。湯屋〳〵とこむ爰もうやうのゆたへ。妹背のこれ成り浦ぶ木の系炭寝よ奇んこうの時。多人変の高きに爰ちさ爰さんこんばかりに宴会と閑よして。浅妓しや変化の猿ようやうてあり。爰ふまとゐひしへうに仕ろうしうて。れそろしく拝ひのけた女房等ごうみとあげて共ひ見と酒宴の真ようろ。花雲も十分酔涼く技けらまて伏而よ入つまあ。沼よのろ〳〵女房等るよ爰の沼身を語らるれ。ぢ云我中まのし計よ沼さうも多くうる類なろ。され沼所よ立て眠ろ宴の沼ろ

よ通て次へ出さん。沼便桶をうのひ酒宴の席へ出ようよ我くも怪爰ろ人ども。言系禁制せ〳〵ゆ人傍ようてるるうなろし。沼爰をとんてなろうしげふ桶ををてようを。髪を巻さ也別ように陪うそ一同よ爰を少るさん拍て爰とあげしかろ。こ我皆沼人のあざゆ巻ご分蔵をなろ。此元を。斯元をうまんもうをみまて。巻島の音色霜雪よ甚時をうひ〳〵て十しまも多べし。故ゆるいろくしみやるよ毋ろ〳〵と。ふ巻のうう多拉べ離をて。ぬべき今ろて。ふよ。沼ひしも。ろうよ負るに沼人のあるんそるに我故に沼ろ巻。美やるあ我みも。巻ろくんつるる鹿こしぐ。武我諸寝の爰破まぐんしどうまうね。山洞の門悔しさんとろうなる我ど。元人のかようめうぐこぐ見ね。ふ映ろふい。よの家より婿グ我の道へらう輿を踏よう横ぎう我ん。ぐめいむこ君の家よあるとのこをひろこ我し我もあり。遅と巻と

英雄百人一首後編卷之三
十

英雄百人一首後編卷之三
九

遂に其計働に落ざるあたらしく結を生て白糸を吉成はく
言葉なし。死雲も女郎おつろんと忍恋をくり返言を乃み
て訪いざるべくも。女の心はゆるされぬ方角の恋に去さぐ水の。飛いよ
くして取定めがたく。さてまろびやをたゝめかへりこふ事ゆゝし。
みい千鉢の誓の一言乃滴を穿めゝ理なるべし

白菜の下

都説宇蓮ハ素女を考ひてよろ。岐蘇の谷峯よりつきよる険石
をさぐり。花弾信濃の山中をこゝのつたに三日六日見とゞろ
をかぎりとう猛くしに。春ハはをぐ本ぐをにた様に敷紅を
踏る。谷水の清きに夏をぞおもふ。袋らの峯と凌きそハ
空に一つのようは姿の変る程ぞ今朝ぐれば。本曽の伏屋の行ぐ
ら撓める雪に路を塞げれ。又立くるみをの系嶽人とそふ仏せり。

こひめぐりをよぶ近国の山深きに住妖怪変化の所あるべ乃れ
ども。まず女が命ぐれめでくいる所なるべきら。先近きよろ遠に及
びんと。信濃一国の幽谷を捜ぐ。えよろ屈強の家の子ゐ二人ゐとを
狩ふ。して鉞をにぎみ苔に附し。松をあて把火とし。巌の下。まる根岩
林。敷原と極め。谷沐の樵夫山祇乃ゝゞがそまぐ鬱うて細ゐと
まども。然の鎖猪の窩のかい妖怪乃住べき所もゐ人ども。ようあ
賜の男に物語を仕りけて捜ぐ。同人ども。深き山中なれどれそ
きあもあやしき所もなりるん。通ゐべき路のかへぐれども。いまだ
ゐそけぬ所のとなりとゐ。ぐ中ゐもる紅る新に麻きぬの袖をこ
ぐ。ふして。本客として魂消ゐ物。あんかれ。杉木接ゐ系ぶ精
入ぐ。同一つふ。てうごめ紅ゆ。ゐ。ようく紅恵なり。乃に傳ゝざれどあと雲
いど。時氣ようて現ま時氣ようて滅とぐ見をとゐ。ま。ゐの化物ゐ

ふべきぞ本より叔父がかたりしハ。昔より此山にかくれみの洞といふ今も
のありて春の比晴天のときハあらはるゝ時を現ず。其懐に栖あれ其
搆せる洞穴鐵にあらはれ見ゆることあれども。帰さるゝ日にかくれみ立
これてうちとも其所を定めがたし。之をうれバ恐しきことあるよし。
山かせぐものハ一生の内をはるにあるまじく。ふと金どることあり。されども百
年に一度ハ現ることなしも待とるや。四五十年このかたおのれが幼きへ
てよりハ其洞を見たるものなし。仙人の住所とや。待へ待るハふもあれ之
より奥ハ名に霧ふかくして方なく。東西南北を別がたく。樵夫山叟も入
ることかたきと語る。守廉是にたけても心ひかるゝを。されど已なくとも
行まねてみんやと。把火先を照させ。露霧ふかきまで勉強て分入りてみれバ
方格なれども。かゝる里ある事をしらざりき。ゆくべきさだかれ
まず。一日絶壁に行かゝる所ありて。一の怪しきものをぞみてけれ。

大巌の上に坐せるが。長ハ七八尺もあるべし。色あかく猿に似て又人面の
ごとく。人を見て笑ふ。其笑ふるのごとく。音の章人に似たり。笑ふ時ハ上
脣額にはらく。人をとらへて喰ふれどもさうし。従者ども恐れ組をとゞんとす。
守廉制して。これこそ世に傳る狒々と云獣なれ。孫千年ふしてころても
その毛の為る事もあるがゝしば。此ものを捕獲がたけれども。其力万
鈞を挙ると。鬼ハ力を以て勝べからず。我もつぱら法に拠て殺れると
て。ひそかふ矢をとりつがひ。這一断が多府を窺ひてつがひ射る。巧まも上唇を
額へ托て射通しけり。一聲さけびて巖の上よりころびおち。矢を
負ひながら逃げゆくを。のがすなと跡をおつてゆけども。行ひかりて
ある谷陰に山岩窟ありて。血まつりひろがりて。把火挑てみれバ獦獣
倒まで動がたく。頬に歸り叫び衰へたり。首尾ほとのりて。やがて大石を挊
て頭をおひしげべ。一聲さけびて。其石を手に拂のでくるのが所に

なげゆりて見れバ窟の内を見めぐらすに。岩のさし出たる上に太刀
一腰あり。錆汚てぬけども希有のものなり。名もさぞありつらんと鹿兒
の刀さられたらひ殺しけるありしこれ有のことなり。ならバ彼猿猴を是
なれバ主従すむ本をはなれて。今も住きぬ此窟に宿せんと皆守
り頭を摇てらへ。家をすみ狒々へなど雄ある獣なり。今殺せし
をうらんバ此なり。今にも雄が帰り来らバつかれたる我をふせたば雖
去べし。是を聞て皆く怕きもせずてはどよて出たり。我妻の事をおもふに
もみれども益なれ殺生して生を失ひしことを我身におもひさぐく
て何も行べき陸へかへりて銅をきれバ里ぶ出て人家に休息し。兎に
角に露命の身なる間へ入力もつきてあるべきたなけれバさすがの丈夫
まも座して天地例なるを思ひはかれとも取りなりて浦の
寝覚の床にぞありし草庵を結びしが後へ其徒等の普つげて

殿門傍に。三依道人とよぶ翁をあり。持統する孔雀明王の法
仰教を滝土に駕ざる時よりて雲仙人西域より携び来て是を伝へてより今
爰に伝流し。病災祈て禍を拂ひ。抜苦与楽の験をあらはしば緬相
玄文の古ト へ往を説来示して遠く信心を抛て讓願を求るもの
日日に絶ず此一七日は三種の密法を修せんとて来諸の人群集せり。
守廉遠例道の為此寺に来り。道人日中の壇をおりるを待うけて
謁をこふし。某へさる西國の者なるが。此國にて妻女を妖怪に取られ
生死の行を究めんが為山に棲る三年を経たり。有合の期ある
を下しまふ所く願に我を害つてり。道人守廉を近づけ面相し沈吟し
て云ぐ。まず時至らず命を全くして待まし。且尊國の生土年齢いかん
廉云。我と太に吉備の産。失しる時二十三才今年は三十なり。
人為に卦を設く。数の言にて云。其名を求くせば得ざれども智なくば人路

命終なり。又問其怪いうるおぼえなくば。道人卦を設け爻を揲て云。大巡之門窺而無間。其密なること。方寸の内。我幻識と量がし守度おもるし。内玄関と返て点化を含て休息を。其日も未の刻さめり。

芳の壇と糸指多き中と。茶供人を拝ひ門かと多り。茶初のめぐり近習お圓玄関と舁と人。烏帽子しして立る威風骨梅小可の人とあり。後茶へ石にひとりて人て炎藥の女人ひづれて客座と通り。此大名乃人をおして何某い諏訪の一属小身なるものなり。再び諸なれだ名のり。ど。先我と卦を絵りるべし。道人其支干方位を問。我いひ国の舊家なるが。幼めて孤とかり大君の家と寄食し生辰を記へど。彼ま甲子をんて是と元道人卦爻教て仏経を云。天賜之之於謙有慶。愛人徳ありて陽と必福つ。ど。寿命い海と。若と久しくよろづ仏と世ざるなり。人の卦とあるべ。ぜ人大と恒ひ。乃人のとべいうんどうん

為らんやうなれども我しを来方事ことのめなんべ。道人の卦とりてるるし。いうんせん人異を着ぬく。通塞の速ひ多し。恐くい徳を換るべ。而あるんと。乃ひの如人を相せ。むと人面相して命教ぞうと再び其支干を問。面とあるとと答。道人卦を設けて云。四と臨て暫て差ひ。永く貞祥を失。必の本とあると資ふて。我改めず。中と多人の婢となりて其家と終んと。大名近侍と命じて金錢巻絹と一せて云。道人を煩て一事あり。我絵へ卦のでくるんと見まとる。

道に一つの紅せざるに。あり。今日る。堂の法会と続て世死を祈ん。とあるなり。乃人云。やそ。晡時の壇に登まで。俱と法会み終て。行ると人て。菓を供じて待さる。洗と壇と中ろう。讀経の宣巻れる。香をひわりて。南無十方の諸天。此一炷の香。四海安静と穀豊登。この数昭明と聖れ君欽ろ。又一炷擬て。十方施と法徳無氣

抜若上樂。又一炷を焼て。今はうひ甲子の貴人如意陀羅尼なしたまへと願ふ祈り求らる。系治の衆議を拾て其社の禄を求む。貴人の義

六十三の年之云

法の座より紀日請てあとをうい紅の衣と襲衣とせん

女房の拾る九十四議之云

あるたてまつりしのみのりうあ人いるとせの命者てきけ

尼人壇を下て善教を法して系ゝ貴人頂戴して收び鈔ずゝ下

向ある。尼人徒弟之命じて玄関之送しむ。守ゝい歴ゝの武家系

諸と尼てれば彼が帰るを待て道人之教むべきてあまべ問ば陽て立

かゝ社今むてふ窺べ。大石の後ふ流い出る蛟人てをゝ見る我女房

ひろ。大之驚き変紀あゝでさ大石の仕業なりろ。誰おもあれ眼あ

の然敵脱さゝとあ法之ノ移ゝひと宣ゆ。為てる絲の一之三第是

殊ひたゝく。為へ。やゝあのひゝしよつゝねてるほとゝ大石をくたのよ

うて抜りてむ。積て多紀者のよふにゝむ間もなく多之三の矢とりゝみ

くゝて噛でむ。ちゝさゝ射ゝに射る矢と為く拂のけ一つも身之あゝ

ど。守庵着忙抜設て切てうゝと大石きりとゝむく眼のひゝ。身之鈔

新く見へどて居ゝくまりて動きゝるど。白柔いりゝうとゝてゝれ是是

も又神色あゝと言系かゝくてゝあゝひゝる。大石如の相と現し係女房ゝ会之

く還も職之就ゝる。女ゝく仕へ法ゝ社ゝ放ちゝ。ゝまゝあゝく一生

うゝと所あゝゝゝゝくゝひゝて為く官府之沙し。大徳寺ゝてゝ為ゝ。女

と行ゝれ系拾ゝゝゝとひゝく之の家人中と教せて是ゝゝし。ゝふ其ゝ

の人さゝと退てゆく守庵が面と拾ゝゝりふ小家の少ゝ大石空ゝうゝう

と落る地ひゝきて肝ゝゝゝて庵のふゝてゝう。起ゝう所早く教ゝて

ゝど俗人の因ゝも流の逆ゝまゝ紀ゝゝゝとゝ。守庵其

悪い寺門に一宿して氣を養ひ仏祖の業と幻。同よこなぐ〜女屋と
ゑかへさる氏張金よこ〜ど。見も真の白菊なるもくるりぐてこと屋
人ふもかうてん怒ひする。理りなるぷくて白菊へこ〜ぐまよ遠なぐ〜
言ふなく別まプをぐ〜ふて世変化いくる徳ありて名知識の右ふも
悪人の相なく凡人なるぬとあ紅ぐ神の化現ようてあ〜わ。寺どの
力量弓矢も近よるてあさぐ。我女の身ようて計按のクりべきやう
なし。彼まさ紙に人ぐ理りんと言人。身人汚さどんべ性意て後段
をもろはるひて結句教さるべ。汚濁よ体〜人来ぬよ
ひて見生の不是と佗なげく。龍雲も詞をぐやふ。身ふ近く
寄眉をなさぐ我こぐ。もはかぐ〜ぐ。さまぐてこて你ぐ貞心を強て
奪べきまもあるぐ〜ぐ。白系洞ふ居てよう女ぐ〜に言
じつまて一疵のるもにをりれぐ。我通力よ弱きて女ぐ仏和ぎこう

遠かくて拳さこけなんと悩るかぐうなく。狂も女ぐ〜に向て我
出身を流て。我い祢世ようひ不よ樣て已よ二ふ。着し大石紙の祢
説さこさして天孫ふ汲ひ。邦守復の祢乃教も入るぐうこと。多の
不徳をかうこて縁遠し。我ふまぐ我居れ
ろよ霧をふして人間よこんせ〜ぐ。永く〜こりて世の事ふあぐ〜
祢ば。我を居ようこもはて勅役のこるし。皇孫に射して反心な
りしべ其餘の事ふ答こあぐ〜こ。むこよう数多の女を抜て来り
ろにひこんぐ。七人の国ぬよ石れ栗ふ天蒼氏の賜人方の産ろ。
縁女れ車もえ来こうあべきを。着のろよれて久しく洞主義
もるこいるぷよ強て遠ろかへこべきも多くい命教こりこん。者ようこ
四山下れ里こに牲と名ぐけてか女を供ぜ〜ふ。我居ろ不みまぐ
多くい是村女なしぐ〜ぐまも欲せざるよう自強よ其事こるろう。古ふ

英山後編巻之三

我も為に形をイ現してより男となり。女だてに出ずまうとのこと
ろーとぐ。我徳をいづれて形にうるれ下に車きるぐるれ
ど。里に出て捨べ所なくて。容儀をうんどと。足をとうてねあがこう。
窮も貧困の人なりしと。白業をうで免多くの女房部にたもれたろう
なんう。此に本心に宿せ守ぐ。明もだ道人にうてあうひと。道人対
新て大ないづりで今日発坊の相をうるうぎのて大に変じて眉ら
けを収へべ。守ぐ元。明日今日いんで相の変をるるのれぐく
なるる。道人元で新もに其少をさとうば。再び蒼を抽き卦を
発て元。鶏水を捧て使者風に翼らる。足春風氷を解のて。足
下夫婦完聚のたえなり。怪しむべしくと。眼を開て祚と出ずまり
ぐのりふして眼を開た。守ぐふさうていて。如る系教あり。必怪ぬ変
干甲ようなんぐ丁酉をねて滅らとべき機あり。係ぐ妻の丁酉八尖の運

甲子八金の運なり。微火をうて大金成済を一生の厄とんぐ。大教の紀の
ろて其完業を消却せんとする所もれぐ。ぬ人貞実のてたやもく流ハ
ぐ。ちの紀に寄るるめと涼くぬるる。完業なるは不祥通も及ぶ教宅
の法に教て女を流んらぬる法金に系ぐうる。変化の悪行貫盈をと
つぐ。此縁をうげざれべいつまぐも亡る時もべぐ。今卦の変ぐうる紀
いて元祇べ今々系縁を逐ることあるる。足又教宅の法の庭弱あるる不
可思議の妙をうるぐ。夫婦再金の後足をいて広く狭くもべとな
んべ再び捨々足下のみに法力を施さん守ぐ元。何系其金のゆべき
紀に夫の母として彼を落すてあうぐ。ふ言んや女をべ。ふ言に月
志をうるうるは為の女の為べ。をきてあうぐ道人なと張弱ぐ。
壇ふ香り。餐を投下賞飯を把て口中呪詞を金ぐ。撒を香煙内み
焼大喝一変を。忽然として殿中昏黒一陣の怪風起る。守ぐ壇辺

に俯伏して乞ひ願ふ石なし。只丈道人の変じて焼雷公今日
は山猪を撃べし。雷公の雖んどるい彼ふ勝てあさいざるが如なりしん。
今日大数到る。撃べ必ずは切言下忽ち壇上より閃電起て一陣の
霹靂雲間に震ふ。漸く殿中晴て日氣をとる。石人守ごと教て
云雷の変せし方格を求ゆゆばゆゆず弱あん守ど一躍し為に法
者を具して峰麓を渡ぎ。雷の音ることとさてやるるまり。彼の
を嘉立ちし谷畔つしら時にうてにいざるに在べきたあり。ま
る石い沙ちゆやふ傍ち石も手ね本の花ともいろく系ちを
ゆるが如し。是雲が方ち弦女と優起とる石なりの為なく小うト
まて教多の山形ちるる白系教人の女房と成て飛れ彩
を立て再會の悦び無べ〳〵ば無いでやと問べ白系うれきの涙と
なりん。今朝雨なれ空に鳴神の抱かを弱しく。洞の上に落ひう変

化を撃撃せり。国て口紙く里をさて出るたうぎに霧ふれて山ち
出ちうとしん。守ど大ち悦び女ぐ〳〵白系ともふ。家人を分ちて里ち遣
ふ。其外い山沢く山ち程に花いつ人ぐうし山の半腹ち廣き岩窟
あり。其内ち石をたて木を横ち人て鉄の結搗あり。四辺蛮のるみ強ら
ま見こて変化ちと見てくて其長一丈あまりの異形の獣。雷火を極を
て褥の上ち死せり。ゆち貢紙切てられて在る細ち人ち成ることを四辺を
引抜まて廻廊の如ち家にうし一画ち陰ちより閃ちうるしぬ
女の鉄く局せ一所なり。正辺れ窓の下に張て強まる細一塩あり。鉄とれ
を陽の紙なり。鉄をぬきてくれ人の鉄のぐうすちつど
や猪くが山岩穴て浮ちうし細ちよく怪物と驚ちやあうん。
ちか絹物財器教多あれども孤をさてず。洞の内ち火を放ちて焼つく
して立帰て。国司みまうて始終を語て虚病せし分説をうん。

希代の事といひて人にも語りしとなり。白菊翁は始めより病に臥して
く悩みけるが、此後道人の霊符をおさめて平愈せり。ま娘寝覚の床より
よりて道人に謝し布百疋を送る。道人今や世財をもて用なしとて是一
匹を留めて服用とし。尚示していはく。世の人陰陽の理にうとく猶て求
強て眼ひ冤家相得ざれど其薄用ひたるによつて遂に死後て教ふ
し。是天地の消息なり。其内にすこしの遅速強弱幸不幸有。尊内の息
望なるも洞に入て後。日日に死の一字をゆるせふとかいて。是即妖術に魅
せられたるなり。其始聴て深く服して退く。是より木曽山中霧のふかき
里なく山深きゆゑまたべし。樵夫杣人賤の男女といへどもこれを知る。女を思ひ
ゐる木曽の深坂これより妻籠の名ある。馬籠とともに而又其府浪者を
宿せしも、兎角のあてなく日日として早くも都の往来て備中の李園に
つまれ。菊のかて手月の蹇開を熟いひ出たれ、かの膚寝に不安く

没せられ。婢妾の謐にしたがひ其後その公よりもつて潔かりし事。尺に貞操
に耻る所あり。終身の瑕瑾これなるのとかくいふさだめたのしにおらず
や。其後其首を舘の後に懸て。自らもとめて見る所の射て年
をとらへ眼をかけさせるぞ。其所を後世猿掛の山岸といひしとぞ。云
と西国のはなしなれど。それとても老いも知らずと語りつたへけるとかや

古今奇談繁野話第三巻 終